円盤と宇宙哲学の研究誌

# 日本GAPニューズレター

1963

7月・8月

# 日本ＧＡＰニューズレター

—１９６３—
7月・8月号目次　　通巻第１７号

警　　告 …… Ｇ・アダムスキ　１
センスマインドとソウルマインド …… Ｃ・Ａ・ハニー　４
質疑応答 …… Ｃ・Ａ・ハニー　６
アダムスキ氏の横顔 …… アリス・Ｋ・ウェルズ　１４
アダムスキ氏と語る …… １６
ソ連のテレパシー実験 …… １９
大変動発生とケイシーの予言 …… ２０
生命を維持する六億の遊星 …… ２１
誌友通信 …… ２２
アダムスキ氏からの手紙 …… ２４
ハンス・ピーターセンからの連絡 …… ２５
土星旅行記 —2— …… Ｇ・アダムスキ　２７
編集後記 …… ３３

# 警告

G・アダムスキ

円盤研究界を混乱と無知の状態にするためにヴードゥー教と〝魔法〟を応用している心霊グループに関する事実についてかつてハニー氏と私が説明したことがあります。この多くは世界中で行なわれています。

行なわれている多くの物事は関係勢力の存在を知らないで行なわれているということが私にはハッキリしています。これは法則の誤用によって傷つけられてきた人々を助けることにはなりません。神秘主義の分野における初心者は1現代の円盤到来事件以来多くの神秘主義初心者が出現しましたが1例の力がどのようにして応用されているかということに気づいていません。電気と同様にそれは喜びと死の両方をもたらすことがあるのです。

現在誤用されたその力がヨーロッパであばれまわっています。各新聞は多くの例を満載しています。スイスではあるフランスの新聞から引用した記事を読んだ一翻訳者が私の関心をそそりました。こんな物語は愉快どころの話ではありません。

これらすべての背後にある原因は〝対抗的想念〟の悪用であるように思われます。これは多くの〝ブライディー・マーフィー〟的な事件に似ていて、その場合初心者の手中にある催眠術の悪用によって無実の人々に多くの危害が加えられています。

東アフリカから来た次の手紙はそのことを自ら語っています。

「私たち家族はC・A・ハニー氏から送られるあなたのニューズを読んでいつもたいそううれしく思っています。ハニー氏の三月号のニューズレターに掲載されたあなたの論文はおどろきでした。あなたが健在できわめて活動的であることと、あなたが耐えなければならない物事があるのをたいそう気の毒に感じたからです。私たちはこれまでサイレンスグループといわれているこの力の性質を知りませんでした。

実際それは多くの事柄を説明していると思います。私の家族もあるわけのわからない理由のために犠牲にされてきたように思われます。私の母は長いあいだ留守をしていてフランスから帰って来ましたが、まったく別人のようになってしまいました。みんなは母の変化にぞっとしました。母は悪のとりこになっていたからです。農園の労働者や家の者を恐れさせたりしました。また私と夫の仲を裂こうとしたり、子供たちを離れさせようとします。農園に満ちていた幸福なふん囲気は一変して、数年間作物が減収となったり家畜が病気になったりして重大な問題になってきました。一同はハッキリとわかるある不幸の影につきまとわれていたのです。

二年後についに一同は母に家を出て行くようにと説得し、それからなしうる限りのことをやりましたが、うまくいったことはあ

りませんでした。私は夜中にときどき目覚めて近くでゆっくりとした息づかいの声を聞くことがありましたが、べつに恐ろしくはありませんでした。夫も私も陽気な性質ですからこんなことはいっさい気にとめませんでした。

ある朝早くこの呼吸音は恐ろしい夢となって、苦悶の絶叫またはフエの音のようなものが聞こえました。私はこんな現象をすべてばからしいことだと思い、多少とも忘れましたが、その後また同じ夢とあの鋭い金切声がいく度も起こったのです。それは約三年以上も続き、しかも思いがけないときに起こりました。

ある早朝私たちが可愛がっていたアルサス種の犬たちが断末魔の叫び声を出してほえたてたために一同は目が覚めました。そこで夫は最悪の事態を予想しながら飛び出ました。しかし犬はどこにも見あたらず、それ以来姿を消してしまいました。そしてその朝私は自動車事故を起こして背骨を折りました。私は数か月間危篤状態にありましたが、そのあいだ例の高い鋭い音が再び聞こえるようになり、こんどはひんぱんに起こって、その音が続くあいだからだがしびれるような感じでした。私はその音を消そうと思い、祈りによって対抗しました。すると数か月たってからそれは減ってきました。やがて私は現在のようにホイールチェアーでゆっくりと動きまわれるようになりましたが、不具者の生活です。

ある朝、夫がひどく苦しんで帰宅しました。その前日彼は毎週の習慣としてポロをやったばかりなのです。その夜恐ろしい苦痛とともに夫は死んでしまいました。しかし私が対抗しようと決心した結果、例の鋭い高音は次第に起こらなくなってきました。すると一年後にこんどは床の上をまくらがすべるような物音がし始めました。それはサーッという音ですが私は少しも恐ろしくはありませんでした。その正体を知りたかったからです。

ある夜その物音が起こったとき（それが最後だったのですが）この音がきわめてハッキリしていたため、私は大きなヘビがまくらの下を動いているのだろうと思いました。私の頭のすぐ下に聞こえたのです。ヘビならばかまわずにそっとしておけば危害を加えないで逃げて行くということを思い出しましたので、私は眠り込んでしまいました。二十三才になる私の息子はだれかの呼吸を聞いて目が覚めたといっていました。

さてあなたは〝円盤問題における心霊的な詐欺行為〟の記事で私たちに警告し、すべてを説明して下さいましたので、私たちはどんな妨害があってもそれに対処できると思います。牧師の一友人がかつて私に次のように語ったことがあります。『真理はいつも勝つのだ。いつかあなたはそうした体験の意味を知るだろう』あなたに心から感謝いたします」以上の手紙は一九六三年五月二十三日付で東アフリカのケニヤ在S・B夫人より私あてに（注。ア氏あてに）送られたものです。

これまでサイレンスグループの団体名を公表しませんでしたが、右と似たようなおびやかしを避けようとされる方にたいする私の忠告は次のとおりです。かつてハニー氏のニューズレター中に載せられた氏の記事をまず参照して下さい。

〝対抗的な想念〟についての初心者は、他人や自分を傷つけたくない場合、その想念を応用する前にその応用の仕方についてしっかり研究しておいて下さい。（注。対抗的な想念というのは、邪悪な暗い想念が起こったとき断固としてそれを拒否する精神的

態度を意味します）

ところでこんどのヨーロッパ旅行について少し報告しておきましょう。その旅行は私がこれまで行なったなかで最も成功した旅行でした。デンマークのハンス・ピーターセンとそのグループはその大いなる努力と彼らが開催したＵＦＯ大会の功績によって高く評価されねばなりません。彼らは足を地につけて宇宙問題にオープンマインドを持って、知的な現実的なやり方で会議を運営しました。

聖人ぶった顔をしない、信頼できる実際的な人々に会ったことは大きな喜びでした。小人数のグループを含めて私は四十二回の講演をし、約二千の質問に答えましたけれども、一九五九年のときのような疲労を感じませんでした。これは旅行計画のすべてが—特にコペンハーゲンにおいて—知識が得られるという機会が与えられたことにたいして感謝の楽しいふん囲気に満ちていたからです。

また新法王の選出を見てうれしく思いました。新法王は故ヨハネス二十三世によって選ばれたミラン出身の人です。彼はきっとヨハネス二十三世の意志を遂行するでしょう。少なくともその意志の最大の部分を遂行すると思います。この選出は宇宙の友のひそかな援助によってなされました。私は旅行中に多勢の〝宇宙の友〟に会っています。彼らもＵＦＯ大会に出席しましたが、そのことに気づいた人はほんのわずかでした。バーゼルとベルギーでは彼らは自らを知らしめましたし、ローマで故法王の危機にさいしては彼ら〝宇宙の友〟は公然と活動しましたが、やはりその正体に気づいた人はほとんどいませんでした。

現代最高の精神的な指導者の一人（注。ローマ法王）に〝宇宙の友〟からのメッセージを伝えることができたのは大いなる名誉であると思います。そのメッセージは後継者にわたされました。法王の私にたいする言葉は決して私の意識を離れることはないでしょう。なぜ私がこの仕事で選ばれたか私にはわかりません。

ローマで私が与えられた情報とそこで発生したある出来事については目下公表することができません。それは極秘に保ちうる信用のおけるごく少数の人にだけ与えられたものです。それは決して忘れることのできない体験でした。（アダムスキ氏と法王と〝宇宙の友〟とのあいだに何事かがあった様子ですが詳細は不明です。注）

ヨーロッパに滞在中、以前の秘書（注。ルーシー・マクギニス）と私とのあいだに存在したギャップに関してかなりの誤ったうわさを聞きました。私たち二人にたいして悪質なデマが流されていたのです。このデマの多くは〝アシュター・グループ〟（注。仮空の宇宙人アシュターを信ずる団体）他の心霊団体から流されています。私はかかる卑劣な策略をなげき悲しみます。このたくらみは私を大衆から切り離そうとして行なわれているようです。私自身のペンによって書かれたものでない声明類にたいしては耳をふさいで下さいと申しあげましょう。

# センスマインドとソウルマインド

C・A・ハニー

センスマインド（肉体の心）とソウルマインド（魂の心）との関係はどのようなものでしょうか。この質問は多数の人によって発せられています。そしてこれが混乱の原因であるように思われます。宗教的なバックグラウンドを持つ人とアダムスキ氏著〝テレパシー〟を研究された方はセンスマインドなるものが教会のいう〝肉欲〟または〝肉体人間〟と同じものであることを理解されるでしょう。この記事はそれ以外のまだ理解されていない人のために書かれたものです。

たいていの人は自分とはすなわち肉体であると考えて、自分がほんとうは肉体のなかにいる住人にすぎないのだとは思いません。あなたの肉体がなにかの仕事をしているのを意味する場合、「私はあれこれの仕事をしている」といいますが、それは〝あなた自身〟と〝あなたを宿している肉体〟とのあいだの相違に気づいていないからです。実際にはあなたの肉体はあなたではありません。それはただあなたがそのなかに住んでいる〝家〟にすぎないのです。

あなたの肉体には〝始まり〟があり、しかも〝終わり〟があります。たしかに肉体はいつか再び異なる形で存在するでしょう。たぶん自然のなかのなにかの生長物として存在し続けるかもしれません。しかし〝真実のあなた〟すなわち教会によって〝魂〟と呼ばれる〝あなた〟は別な肉体つまり〝家〟のなかで生き続けます。

人間が用いるこの〝家〟の一部として、ある〝物〟が存在します。そして肉体が存在を中止するときこの〝物〟も存在を中止します。この〝物（複数）〟のいくつかをわれわれは人間の〝感覚（複数）〟といっています。人間は特に四つの感覚すなわち視覚、聴覚、味覚、臭覚を持っています。ところがわれわれが第五感と呼んでいるもう一つの感覚は触覚といわれている〝フィーリング（心の感じ）〟です。これは右の四つの感覚と同類ではありません。なぜなら右の四つに優先する英知の一部であるからです。

いま述べた四つの感覚はあなたがいま使用している肉体の所有物です。それはあなたが過去に（前世に）使用した肉体の所有物ではありません。あなたの現在の記憶はあなたの現在の肉体の脳細胞に刻まれた記録であって、あなたの前世の肉体のどれとも関係はありません。それを別なふうに説明しますと、あなたの意識的な心はあなたが現在使用している肉体とともに始まったのであって、肉体が知っているあらゆる物事を教えられるにちがいないということになります。意識的な心は不滅なのではなく、肉体とともに始まるばかりでなく肉体とともに死滅します。それがセンスマインドです。それは肉体を使用している〝真実のあなた〟によってコントロールされねばなりません。そしてこの〝真実のあなた〟はソウルマインドすなわち〝真の潜在意識〟と呼ばれます。それは始めも終わりもない、肉体の奥にある英知なのであって、

肉体は崩壊しても別に存在し続けます。

以上が、あなたが前世の記憶を持っていない大きな理由です。それは、あなたの現在の記憶のほとんどすべてがセンスマインドの産物であって今生だけに関係があるためです。〝真実のあなた〟〝不滅のあなた〟は潜在意識としてバックグラウンドのなかにあって、表面へ出てくることを許されません。その理由は、誕生時からこの世界のあいまいな物事を信ずるように訓練されてきて、ソウルマインドすなわち〝真実のあなた〟を潜在意識というバックグラウンドのなかに底深く沈み込ませることに成功したセンスマインドによって状況全体がコントロールされているためです。

この点においてわれわれは、ソウルマインドすなわち〝真実のあなた〟は、あなたの現在の肉体のいかなる体験にも関与することが許されなかったといえるでしょう。この状態があなたの生涯を通じて続いたとして、あなたがついにいわゆる死を経て次の世で別な肉体を得て生まれかわったとすれば、現在の肉体のセンスマインドは忘れ去られてしまい、存在を中止することになります。〝肉体の心〟は肉体の崩壊とともに終滅するわけです。一方〝真実のあなた〟は次の世で生まれかわって新しい肉体を得ても今生の記憶を持ってはいません。これは今生のセンスマインドがソウルマインドに〝連絡〟をしなかったかまたは自らを知らしめなかったためです。

あなたが今生でジョン・ドウという人物であるとして、右の状態のもとに他界したとすれば、あなたは次の世でジム・ブラウンという人物として生まれかわるかもしれません。これによって私が意味するところは、ジム・ブラウンの個性すなわちセンスマインドは新しい肉体とともに創造されたということです。ジョン・ドウは永久に存在しないでしょう。彼は不滅ではないのです。しかし〝肉体の背後にある英知〟すなわちジョン・ドウのソウルマインドはジム・ブラウンの肉体のなかで生き続けますので、その意味において〝真実のあなた〟は決して死ぬことはなく、永久に生きるというわけです。つまりジョン・ドウのソウルマインドとジム・ブラウンのソウルマインドとは一体であって同じものなのです。しかし両者のセンスマインドは異なっています。これはわかりにくいことかもしれません。ゆっくりと何度も読み返して下さい。そうすれば私の意味することがはっきりしてくると思います。

人間は知識が進歩するにつれて〝自分を知ろう〟としてきます。われわれがこの知識を得始めるとき、われわれは人間が肉体ではなくて、ただそれを一時的に使用しているにすぎないことに気づくでしょう。人間はまた例の四つの感覚をコントロールして、それを宇宙の法則に従わせるでしょう。宇宙の法則はその各感覚器官をソウルマインドによって応用される原理に従わせようとしているのです。人間は自然の諸法則に従って意識的に生き始めています。そうすることにおいて人間はセンスマインドをソウルマインドの型にはめるのです。センスマインドの一部がソウルマインドと一体化し、創造者の法則類と一体化するとき、それは肉体の死とは別に生き続けます。そしてそのときジョン・ドウとして知られた人間はジム・ブラウンとして知られる人間へ転移します。これが進化の階段を昇る真の発達であって完全に転移するとき、それは前世の記憶が持ち運ばれるということを意味します。

# 質疑応答

C・A・ハニー

問　1　ある真実のコンタクトマンが秘密結社によって殺された例について、あなたは〝宇宙の友〟からなにかを聞いていますか。（マサチューセッツ州ドーチェスター、M・P）

答　いいえ聞いていません。〝宇宙の友〟に質問したり回答を直接に得たりする機会は、多くの人が考えるようにそうたびたびはないのです。コンタクトは〝宇宙の友〟が知識を伝えたいと思うきに彼らによって準備されます。私が重要だと感じる問題でも必ずしも重要でない場合があります。右のような事件はたいていの失そう事件がそうであるように事実が少々ゆがめられて報導される傾向があります。いずれ右の事件とリヴァリーノ・ダ・シルヴァの失そう事件について〝宇宙の友〟から情報を得た上で記事を準備しましょう。

問　2　アダムスキ氏はなぜもと計画したとおりにメキシコへ移住しないのですか。なぜ彼は計画を変更したのですか。（シアトル、W・L）

答　私が知る限りでは彼は将来移住する計画を持っています。彼の当面の目的は〝科学と哲学の学園〟を設立することにありますが、必要な基金がないために移住のほうは延ばされました。

問　3　あなたのニューズレター中の記事で、サイレンスグループの力に抵抗する場合、必要とあれば怒るか、少なくとも挑戦的な態度をとれといっています。これはしかしアダムスキ氏の態度や人間の直感的な態度から見れば不適当なように思われます。抵抗してはいけないというわけではありませんが、あわれみの感情があればこれは不可能ではないでしょうか。（オレゴン州、L・G）

答　そうです。たしかに不可能です。これについては私の書き方がきわめて拙かったと考えた一友人がもっと適切な言葉を寄せてきました。それで私の至らない点が読者に誤った概念を与えたにちがいないと思っています。友人の言葉というのは次のとおりです。

「ひかえ目にいっても、怒りが破壊的な感情であるという事実を考えて、あなたの記事に驚きました。私のみるところでは、かかる反応（抵抗）は人がある状態からのがれ出て自由になろうとする場合、それにたいして大きな刺激と力とを与えます。私が自分の肉体がすぐれた健康状態にあることを十分に知っているという事実にもかかわらず、ある不調和な状態が起こってきたとき、私は断固たる態度でもってあらゆる想念や状態が私に属してはならないこと、私の運命と一体化してはならないこと、想念それ自身の目的を達するために放送者のもとへ帰らなければならないことなどを想念に命じます。この場合感情は存在しません。このようにしますと平静さと調和とをいかに早くとりもどせるかは驚くほどです」（注。ハニー氏は〝怒り〟というかわりに〝断固たる拒否〟といえばよかったようです）

問　4　〝ファティーマの奇蹟〟の物語に出てくる現象は〝宇宙の友〟と関係がありますか。（アーカンソー州プラマヴィル、L・

F）

答　私の知る限りでは関係ありません。まず全然関係はないといってよいでしょう。こんな現象は多数の人間が極端に興奮するときザラに起こることで、これに似たような事件はしばしば発生しています。この種の現象は群集ヒステリアによって起こるものであって、スイスの心理学者カール・ユング博士が専門的な立場で説明しています。

問　5　現代の円盤出現時代になってから、（一九四七年以来）移住した人も一時的に訪問した人をも含めてどれくらいの地球人が他の遊星へ連れて行かれましたか。（L・F）

答　私は報告や体験によって他の遊星へ行ったという例を知っているだけです。直接に個人的な証拠を持ってはいません。しかし報告によれば多数の人々がいろいろの理由で他の遊星へ連れて行かれたようです。その数については私は知りません。

問　6　アダムスキ氏が次に出す予定の書物の発行日、発行所名、書名をお知らせ下さい。またあなたは自分で書物を出す計画を持っていますか。（L・F）

答　目下アダムスキ氏の原稿は書かれていますが、発行日、発行所名、書名などは決定していません。私自身は書物を出す計画を持っていません。

問　7　〝宇宙の友〟のなかにはハゲ頭の人、醜い顔をした人、肥満体の人、キズあとのある人などはいないのでしょうか。彼らは地球人によく似ているといわれていますし、こんな人は地球人のなかにたくさんいますが—。（L・F）

答　います。〝宇宙の友〟のなかには事故によりキズあとのある人もいます。しかし多くはありません。私はかつて高度に進化した一人の〝宇宙の友〟会ったことがありますが、その人は大きなキズあとを持っていました。したがってこの点に関しては私は個人的な体験からいえるだけです。美ぼうということになれば、これは皮ひとえのことにすぎず、何が美で何が醜かという考えは個人によって異なるでしょう。人格こそものをいうのです。ただの肉体的な見地からすれば〝宇宙の友〟のなかにはたしかに無器量な人もいますけれども、彼らのいわゆる内奥の美は必ず表面にあらわれています。彼らのなかには肥満体の人はほとんどいないようですが、私の個人的な考えではいる可能性はあります。

問　8　〝宇宙の友〟のなかにはイエスが昇天のときに用いたと思われる空中浮揚ビームを用いた人がありますか。（L・F）

答　あります。

問　9　あなたはかつて〝宇宙の友〟とのコンタクトを証明するための証拠書類や写真類を所持していると述べました。私はあなたの個人的な問題をせんさくしようとは思いませんが、その写真類はあなたが撮影したものか、それとも〝宇宙の友〟が撮影したものか、それは宇宙船内の光景かまたは宇宙船自体をとった新しい写真か、または〝宇宙の友〟の写真なのか、以上についてお知らせ下さいませんか。（L・F）

答　私がいったのはそういう意味ではありません。将来において証拠書類が出ることになるだろうといったのです。現在私はそれを持ってはいません。私が誤っていなければ自分で写真をとることが許されるでしょう。

問　10　あるグループがとなえるところによりますと、土星以遠

の諸遊星は高度に進化しているということですが、これは事実ですか。またアダムスキ氏は冥王星の外側にある遊星から人類が地球へ来ることに関してなにかいったことがありますか。（L・F）

答　アダムスキ氏がこれまでに会ったという他の遊星の人間は、（注。ア氏が地上で個人的にコンタクトした相手）火星、金星、土星、木星、天王星、海王星などの人間です。冥王星以遠の諸遊星はまだ宇宙旅行を開発していないと氏はいっています。（注。これについては別項質問を参照）太陽に近い遊星ほど進化しているのだということで、これからみますと水星が最高度の遊星ということになります。しかし地球は人類の〝堕落〟のために低い段階にありますが、このことは〝同乗記〟中に詳述してあります。

問　11　〝宇宙の友〟から送られる真実のメッセージや回答と、受信者の心のなかで作り出されるニセモノのメッセージや回答とをどのようにして見分ければよいでしょうか。（ペンシルヴェイニア州ロックヘイヴン、M・H・K夫人）

答　あなたは見分けることはできません。これが〝宇宙の友〟がテレパシーによるメッセージ放送の方法を用いないで直接に会見するおもな理由です。われわれは〝宇宙の友〟から直接多くのテレパシー連絡らしきものを感じることはできますし、その確実性は内容によって一応判断できます。しかしそのメッセージが真実の〝宇宙の友〟から送られてきたものかそれとも受信者と称する人の希望的観測（注。こうあってほしいという願い）の産物なのかは確証がない限り決して知ることはできません。

問　12　私は円盤関係の書物約八十点のカタログを持っています。このなかにはいかがわしいものがたくさんありますか。あなたの機関誌を含めて米国にはどれくらいの正しい刊行物がありますか。（M・H・K）

答　私のニューズレターを正しいものに加えていただいて感謝します。私がどの書物がインチキでどの書物が正しいと思っているかを言明することは賢明ではないと思います。あなたは私のニューズレターを〝オーケー〟ときめたように各書物については内容によって自ら判断しなければなりません。おそらくたいていの刊行物や書物の著者は自分の書いた記事を正しいものと考えているでしょう。つまり著者にとっては内容は真実なのであり、夢想家にとっては夢です。コンタクト例について書かれた刊行物のほとんどはこの部類に入るということは残念なことです。次にアダムスキ氏がいっていることを掲げましょう。

「自分の読む記事の内容に関して自分で推論をするのに一つの方法があります。次のように説明しましょう。あなたがこうあってほしいという夢想家でないとして、なにか自然の法則に従ったものを読む場合、内奥に調和の感じを持つでしょう。これは受け入れてよいものです。

しかし分裂、罪の宣告審判、予言（特に一定の日付を指定している場合）、個人的な報いの約束などが含まれているとき、不安、恐怖、不満などの感情が読者の心にわき起こるでしょう。こんな書物は文句なしに捨てる必要があります。

人間と自然は本来ありのままの自然の姿にあるべきものですから、ある特定な予言が遂行されないように諸条件が変更されることがあります。それゆえ他の遊星の人々は時々刻々を生きながら展開してゆく出来事を観察し、自己の能力のあたう限り起こって

くる環境を処理してゆきます。この理由のために〝宇宙の友〟は約束や予言などをしないのです」

問 13　私はこれまでにある性質や心の感受性を達成するために生活の必要品や仕事類をきりつめて少なくする必要があると感じていました。しかし同時に日常生活の窮境はどうしても働かざるを得ない状態にしてしまいます。私の質問は次のとおりです。失敗または失望などに執着するのは誤りではないといえるのではないかということです。というのは探究者は自分の人格から当然受けるべきものである豊かさを失うことになるであろうからです。（カナダ、ウィニペッグ、J・D）

答　人間はだれでも自己の失敗によって何かを学ぶ（そして当然利するところがある）ということを知らねばなりません。もし人間が急速に多くを吸収しようとして気づかねばならない物事に気づかないでいた場合、これは急速に多くを吸収しないでゆっくり行なえという信号になります。人間は物事をいきなりトップから始めてまとめあげることはできません。自分のレヴェルで始めて次第に拡張してゆく必要があります。

古いことわざに、人間がなそうとする物事が本人を喜ばせるか楽しませる性質のものであるならば、それは不法な不道徳なものか裕福にしてくれるようなものでなければならないというのがあります。今日多数の人は進歩の階段を昇ってゆくためには肉体的な快楽を捨ててしまわねばならないと誤って考えています。極端に行なわれているこの考え方は〝鞭打苦行者〟（注。十三、四世紀ごろヨーロッパで人の見ている前で自分をムチ打つことを苦行とした狂信者の一派）その他の宗派から起こったものです。もっとおだやかなところでは野球、映画その他の大衆娯楽を避けようとする人もあります。

多くの場合、人々はなにかの〝隠れ家〟にこもってすべての財産を放棄し、貧困を好み、白衣を着てはだしで歩き、その他バカげた行法を行なったりしては〝精神的に向上しよう〟としています。ところが実際にはこんな人は自分と世間とに危害を加えているのです。〝生長するためには〟人間は自己の周囲のあらゆる人に会ってその意見を聞くべきであって、世間をのがれてはいけないのです。

もし人間が正常な充実した生活をすごして、自分の〝精神的な向上〟について悩んだりするのをやめるならば、自然のままの姿で急速に向上するでしょう。他人にたいして「こうあってほしい」という考えを持たないで、そのかわりに必要とあれば援助の手をさしのべて、自分にもたらされるさまざまの意見を調べてごらんなさい。われわれはこれら他人の意見から善なるものを吸収し、そうでないものを捨てて、進歩しようということで悩むべきではありません。するといつかそのような努力をしないのに自分が進歩しているのがわかるでしょう。

人間の潜在意識が人間にかわって問題を考えてくれます。どれを受け入れるか、どれを拒絶するかということは潜在意識が合図をしてくれるのです。この〝内部の感じ〟に従うようにしなさい。そうすればあなたは正しい物事をなすのに悩みはほとんど起こらなくなります。たとえ誤ちが起こってもそれは価値のある教訓とそれによる知識とを与えるでしょう。

問 14　アダムスキ氏とあなたは人間と宇宙の性質が完全に霊的

なものだということをハッキリ述べていない点を私は奇妙に思います。もし〝宇宙の友〟がまだこの点に到達していないのならば地球人は彼らより進化していることになります。なぜならわれわれはこれが証明によって事実であることを知っているからです。直観ばかりでなく理性も満足しなければならないと思いますが—。（M・K）

答　それが証明されたという例を見たいと思います。私にとってはこの考えは不合理であるのみならず直観にも反すると思います。私がこの問題を討論する前にあなたのいう〝人間と宇宙の性質〟の意味をハッキリさせて下さい。そしてわれわれが同じものについて語り合っているということを確実にして下さい。たしかに人間は、人間と他の万物の両方を感覚器官や精神的な方法で知覚するのですけれども、このことは物質や宇宙の性質を霊的なものにすることにはなりません。宇宙はやはり物質的なものであって、われわれは精神的な手段でそれを知覚しているにすぎません。

問　15　私は最近ディノ・クラスペドン著の〝円盤とのコンタクト〟を読み始めました。彼は円盤の機長と肉体的なコンタクトをしたといっています。これはほんとうでしょうか。彼の見解とアダムスキ氏のそれとには相違があるようですが—。（ケアリフォーニア州、J・A・B）

答　私はアダムスキ氏が〝宇宙の友〟とコンタクトしたことを知っています。私は個人的な証拠を持っています。信用だけで信じているのではありません。クラスペドン氏とは面識がありません。彼の著書の内容によってその物語を判断できるだけです。彼がきわめて多くの点で誤っているという事実は、彼が実際にはコンタクトをしなかったかまたはコンタクトしてもそれに多くの作り話をつけ加えるために想像力を応用したことで明らかです。私に関する限り、もしだれかコンタクトマンが〝同乗記〟の内容に反する記事を書いたりするならばそれは事実ではありませんし、私はその物語を割引して考えます。〝同乗記〟は絶対に確実であるばかりでなく、現在円盤問題で最も信頼できる書です。

問　16　多数の人はなぜバカげたコンタクトストーリーを信じるのでしょう。私はあるコンタクト物語を支持している人々を知っていますが、その自称コンタクトマンは円盤はハトの羽で作られていると称しています。（ロサンジェルス、F・N）

答　常識というものはもはや人間の決断力や信念を支配しません。その例として〝真に信ずる者〟と題した著書から引用しましょう。

「真に信ずる者とはだれであるか（これはこの書が質問し解答している問題である）。読者はどうしてそれを見分けることができるか。それはキリスト教から共産主義に至るあらゆる主義・思想をわたり歩く、罪に悩む（少なくとも潜在意識的に）ヒッチハイカーのようなものである。当人は狂信者であって、礼拝の対象とすべきスターリンかまたはキリストのような人を必要とする。彼は自然の事物の不ぐたい天の敵なのであって、達成できもしない夢を求めて自分を犠牲にしようとする。彼は今日あらゆるところを歩きまわっている。

本書は大衆運動の背後にひそむ心理状態の爆弾的な報告書であり、真に信ずる者の動機、反応、可能性、力などを分析する。ここにはかかる狂信者、すなわち主義から主義へ転々とし、必要とあればその主義のために自己の生命や他人の生命までも犠牲に

しようとする人間の恐るべき、また魅力ある研究報告が載せられている」

不幸にして右の引用で述べられた型の人間が円盤問題に多数関係しています。いまや完全な混乱が全UFO研究界を支配しているのです。せんさく好きな人にとってもはや作り話から真実を切り離すことは容易ではなく、多数の人はそうしようという努力さえしません。人々は幻想でもって自分の感覚をごまかしては満足し、かつて真実のために戦った元気さでもって逆に真実をなきものにしようと戦っています。彼らは自分自身のすさまじいほどの〝信じようとする意志〟に支配されているのです。

こんな狂信者がいなければジョン・バーチ協会のような団体は存在し得なかったでしょうし、その他過激な団体も存在し得ないでしょう。かかる団体に関係のある諸問題のなかには真実なのもあるでしょうが、大部分は真実ではなく、それらは自分で考えることのできない多数の人に影響力を持つ少数の指導者の心中や夢想のなかに存在します。そして自分の力で考えようとする人はただちにひどく攻撃されます。

こうした狂信者がいなければ心霊グループは寸刻も存在できないでしょうし、またこんな人がいなかったら円盤に関する真実もずっと以前におおやけにされていたでしょう。素ぼくに他人を信じてはいけません。アダムスキ氏をもC・A・ハニーをも〝宇宙の友〟をさえも狂信しないことです。自分自身を教育するかわりにあらゆる他人の見解を読んで、健全な研究と論理にもとづいて自分の常識による判断に到達し、疑問の両面を理解することが大切です。

問 17　前掲の質疑応答であなたは「アダムスキ氏は冥王星の外側の遊星はまだ宇宙旅行を開発していないといっている」と述べています。しかしア氏の最近の報告で氏は「全遊星は宇宙船を所有している」と言明しています。どちらが正しいのですか。（イングランド、C・P、その他多数）

答　この機関誌の多数の読者はきわめて注意深くて、これと同じ質問がたくさん寄せられました。これは私の誤りでした。ずっと以前にアダムスキ氏は冥王星とその外側の諸遊星は自家用の宇宙船を建造していないと私に語ったことがあります。私が質問に答えたのはこの記憶にもとづいたものでした。今週私はア氏に再度尋ねてこの問題を明らかにしてもらいましたが、その結果私の記憶が誤っていたことがわかりました。冥王星以遠の遊星は自家用の宇宙船を建造していないけれども、近年になって他の遊星から調達しているということです。彼らも宇宙を旅行していますが、まだ地球へ到着するほどの努力をしてはいません。

今日地球は大気圏外を探険する船を持っていますので、太陽系中の十二の遊星はすべてなんらかのタイプの宇宙船を所有しているといえます。状況は急速に変化しますので、十年前の言明は今日もはや真実でなくなっています。

問 18　先刻の質疑応答で（注。問12）アダムスキ氏は分裂、罪の宣告、審判、予言、個人的な報いの約束は宇宙の法則と一致しない旨を述べています。しかるに聖書は予言と審きで満ちているにかかわらず神の言葉を含んでいます。それでもやはり聖書を文句なしに捨てねばならないでしょうか。（マサチューセッツ州ナティック、J・M・K）

答　聖書はそれ自体を〝神の言葉〟であるとして徹底的に論ばくしていると思います。（トーマス・ペイン著〝理性の時代〟を参照）しかし聖書は知識という富を含んでいますので、オープンマインドをもって読まれねばなりません。そして望ましくないものを捨てて望ましいものをとり入れることは他の興味ある書物を読む場合と同様です。世界各地に各種の〝聖典〟があり、これらも信者によって〝神の言葉〟であるといわれています。このなかにはキリスト教の聖書より古いものもあります。このうちのどれが実際に神の言葉であるといったいだれが決定できるでしょうか！

聖書中の予言類は正しく訳されていればきわめて価値があります。それらの予言はもと述べられたとおりに正しく実現するでしょう。なぜでしょうか。それは聖書中の予言はもともと現在の人間が考えているような予言ではなかったからです。それらは大昔に準備されたある計画の一部なのであって、地球と地球人の運命を扱ったものであったのです！

この計画は長い時代を通じて遂行されてきて、現在もその計画者（他の遊星の人類）や地球上に住んでいて〝宇宙の友〟と共に活動しているある人たちによって続行されています。それはきわめて長期間にわたる計画なのですが実現しつつあります。それを実現させようとする人々がそのために活動しているからです。それは心霊的な予言のように未来を予告しているのではありません。むしろそれは家を建てる人に似ています。当人は設計し、人々は働き始めます。多くの障害がその完成予定日を遅らせるかもしれません。しかしそれは明確な計画の一部であるので、設計者は最後には出来上がりがどのようなものであるかを正確に予報することはできます。

問　19　（アダムスキ氏にたいする質問）あなたの〝生命の科学〟講座の内容はどんなものですか。（質問者多数）

答　（ア氏より）それを数語で説明するのは不可能です。とにかくこれまで地球上で教えられたいかなる教えとも異なります。現代文明の歴史において始めて〝不滅〟にたいする明確なキーが与えられるでしょう。それを応用すればあなたの未来に関するあらゆる疑惑が解消するはずです。

問　20　（アダムスキ氏へ）一九五二年十一月二十日のデザート・センターにおけるコンタクトの際にいた数名の目撃証人はなぜあなたに協力しなくなったのですか。また、あなたがきびしい人でつき合いにくいと彼らがいっているのはなぜですか。

答　（ア氏より）多くの場合に問題になったのは金銭でした。また自己満足を求めて離れていった人もあります。私がつき合いにくいきびしい人間であるかどうかは自分ではわかりません。だれかが真理を求めて私のところへ来るならば、本人はその真理を見い出すでしょう。私はへつらいません。真理はしばしば利己主義者にとっては不愉快なものです。そしてただ利己主義を増進するために他人や私の時間を浪費する余裕はありません。人は自分の計画に真剣であるならば本人は宇宙的な知識を得るためにいかなる物事にも耐えるでしょう。これは攻撃のかわりに創造者にたいする謙虚さによって達成されます。イエスはいっています。「私の道はせまくてイバラで満ちている」そしてイエスは多くの人を、その身辺にいる人々をも不快にしました。

真理はその自然の状態にあるとき利己主義者がこれを受け入れ

るにはきわめて困難です。なぜなら利己主義者はへつらいに慣れていて、本入を得意がらせる人々にのみ応じるからです。人間はへつらいや自慢や頑固さでもって自由、幸福、永遠の生命を得るのではありません。こんなことを利用する人は自分自身の魂をあざむいているのです。

**問 21** （アダムスキ氏へ）あなたはメキシコか他の地に〝新しき村〟を建設する計画をまだ持っていますか。

**答** （ア氏より）持っています。現在五十世帯以上の家族がそれに参加する予定ですし、準備でき次第に集まるはずです。私はまず場所を確保しなければなりませんが、今年中にそれをすますつもりです。場所が決定すれば右のグループはデンマークのGAPリーダー、ハンス・ピーターセン少佐とその協力者たちが引き継ぐことになっています。（注。これは必ずしもデンマークへ移住するという意味ではない）ハンスはこの〝新しき村〟の建設の仕事を引き受けたい意志を表明しました。コペンハーゲンの例の大きな団体を（注。スカンディナヴィアUFO協会）をひきいるほどの能力を持つ人ですからその仕事には適任です。計画がもっと具体化するまでお待ち下さい。（注。アダムスキ氏はかねてからメキシコへ移住する旨を洩らし、同時にある目的を持つ人々の集まりであるグループを建設する計画を持っていました。ただしまだメキシコへ決定したわけではありません）

**問 22** 地球の創造はいつごろ行なわれたか〝宇宙の友〟は知っていますか。また創造の完成はいつになるかを彼らは知っていますか。（オレゴン州セイレム、C・Q）

**答** あなたの質問は二様の意味にとれます。まず、それが地球とそれに関連したすべての組織を意味するのならば、最近の科学知識は地球の創造を三百億年前としています。〝宇宙の友〟はこの問題で正確な数字を出してはいないと思います。私はそれに関して彼らから何も情報を得てはいません。

創造の起源に関する限り、全宇宙を含むことになればこれを確定するのは不可能です。人間の心の理解力をこえた物質の起源にまでさかのぼるからです。われわれは宇宙の始まりを考えることはできませんし、また始まりがなかったとも考えることはできません。

もしわれわれが創造に始まりがあったというならば、そしてそれを見ることが可能であったとするならば、その始まり以前に〝無〟があったということになります。そこで、最初の電子が存在し始めてこれが存在物の最初の分子であったということにしましょう。するとこれはどこから来たもので、また何がそれを創造したのでしょうか。それともなにかの目に見えない力がそれを生み出したのでしょうか。そうだとすればその目に見えない力はどこから来たのでしょうか。これと同じ問題にわれわれはここで直面しています。なぜならわれわれは〝始まり〟なくして常に存在していた目に見えない力を考えることはできませんし、またそれが〝始まり〟を持っていたことも考えることはできません。この問題全体は人間の理解力をこえています。

**問 23** モハーヴェ砂漠に集合する円盤研究グループの大集会に関する記事がありますが、これは正しいグループですか。（ケァリフォーニァ州オーシャンサイド、A・B）

**答** あの記事は多くの点で誤っています。この大集会はジャイア

ントロック空港で行なわれ、円盤に関心を持つ人々から成っています。加うるにその物語には三年ばかり前かそれ以前にそこで発生した出来事が述べられていて、それが今年も発生したとか、あるいは集会のたびに発生するのだというようなことをほのめかしています。あなたのいう記事の書かれたおもな目的はそこへ出席する人たちを嘲笑することにあるようです。毎年この集会で演説をする自称コンタクトマンたちは〝心霊的な〟コンタクトマンですが、彼らをからかうのはよくないと思います。人間だれしも自分の望むものを信ずる権利があるからです。

問 24 アトランティス大陸について最近あなたはそれがニューヨークの沿岸沖合にあったと述べましたが、大英百科辞典がアトランティスは神話だといっているのはなぜですか。（ウィスコンシン州ニーナ、K・L）

答 大英百科は各執筆者の意見を反映していて一大権威ではありません。執筆者は各自の専門分野で優秀なのでしょうが、専門外のことになると一般アメリカ人ほどに知っていないことがあります。家に電線を引こうとするならば電工を呼ぶべきであってだれも鉛管工を呼びはしません。同様に円盤に関する知識を得ようとするのならばその問題を研究した専門家か研究家の書物を読むべきで、月なみの天文学者に聞いてもだめです。アトランティスの知識についても同様です。

アトランティス、レムリア、パン、ミューなどはかつてすぐれた文明を持っていた、海底に沈下した大陸の名です。この問題についてはいまでも多くの知識を得ることができますし、各種の新発見や近い将来出現する新大陸はこの問題を再燃させるでしょう。

# アダムスキ氏の横顔

アリス・K・ウェルズ

私が始めてアダムスキ氏に会ったのは一九三四年です。そして一九三五年には彼のもとで探究していた人たちの仲間入りをしました。当時私の人生上の仕事はだいたい終わったように思い、書物で得られないもっと広い知識を求めていました。

ロサンジェルス・タイムズ紙の日曜版に掲載されたアダムスキ氏に関する記事を友人が知らせてくれました。そのころ私は書物が教えてくれない知識を求めてインドへ行くつもりでいましたが、その友人はとにかくアダムスキ氏に会って彼の話を聞けば関心が起こるだろうといいます。

手紙によって私はアダムスキ氏がパサデナで講座を開いていてグループを指導していることを知りましたので、それに参加することにきめました。アダムスキ氏は、まるで無言の質問に答えるかのようにインド哲学について話し始めました。彼の講話は次のような意味のものでした。「インドの哲学は創造者の目的と一致していない。なぜなら人間は地上におかれて〝父〟の庭を好むように命じられている。ところがインド人は極端に走ってしまい、霊魂を賛美し、人生のいわゆる物質的な面を無視している。これは〝父〟の創造の一部ではあるけれども全部ではない。自然はパ

ランスのとれていないものをいつまでも寛大に扱いはしない」その他多くの話を聞きましたが、それらは正しくて心あたたまる話のように思われましたので、まもなくインドへの旅行を忘れてしまいました。

さて人間ジョージ・アダムスキについて少し観察してみましょう。これまで多数の人が彼はいかなる人物なのか、いかなる源泉から彼は知識を引き出すのか、といった点を不思議がっています。彼の知恵の言葉に驚嘆している人たちによって多くの意見が述べられましたが、これはさほど重要なことではありません。彼が与えようとするものは、まじめな真理の探究者が餓えて求めようとしているものです。彼の哲学は実際的なものであって、生活の助けになり、しかも進歩してゆくなにものかです。

人間が個人的な見地よりも宇宙的な見地から真理に直面するのに真剣であるならば、人間の生長には決してよどみや停滞はありません。私がここで個性というのは人間のエゴを意味します。しかしそれは努力する価値があります。

少しずつ〝因〟の領域が見え始めて、永続的な価値を認める感覚が個人のエゴにとって重要だと思われたものにとってかわりつつあります。そして人間は生命のさまざまの表現のなかに生命の一そう広い見解を得始め、自然のもろもろの美にかこまれて静かに座り内奥の自己は感謝の歌をうたいます。すると仕事はもはや苦しくなくなってきます。物事を行なうことと人類に奉仕することの喜びが充分になってくるからです。

アダムスキ氏の教えには〝へつらい〟や空想的な添え物はありません。これらは彼が弟子たちに克服させようとしているエゴに属するからです。これは弟子がさらに他人を助けるようにするためです。私が誠意をもっていえるのは、ジョージ・アダムスキ氏ほどに純粋で自分の努力に不屈な人を見たことはないということです。私は長いあいだ彼の門弟であったことに感謝しますとともに、彼の知恵を自ら獲得しようとする人がもっとふえることを望んでいます。真理へのドアーは知識を求めるのあまり自我を忘れることのできる人すべてに開かれています。

人間はまさに〝父〟の国の広大さを知ろうとしています。というのは地球人はまもなく他の遊星へ到達しますし、少しずつ人間の生命にたいする制限された概念は知識によっておきかえられるからです。

古いことわざの「真理はあなたを自由にするだろう」は知恵の言葉です。偏見、自分だけの意見、利己主義などは人間の魂を束縛する罪人です。

（注。アリス・K・ウェルズ夫人は、アダムスキ氏が一九五二年十一月二十日にデザート・センターではじめて金星人と会見したときの六人の目撃証人の一人として知られています。そのとき彼女は双眼鏡で会見の模様をながめながら金星人の姿をスケッチしました。これは〝空飛ぶ円盤実見記〟に掲載されています。またア氏のグループがかつてパロマー山上に住んでいた当時、〝ホリディ〟誌に二度も紹介された〝深切さとあたたかいふん囲気とに満ちた〟山上の有名な食堂の経営者でもありました。現在はア氏の秘書として主としてタイプライティングの仕事で活躍しています）

# アダムスキ氏と語る

—デンマーク、〝ジランズ・ポステン〟紙
一九六三年五月六日付より—

円盤に乗って月の裏側を見た人と共に語り合うのはたしかに容易なことではない。

ところで記者は一時間近くもジョージ・アダムスキ氏と語り合った。これはペンと紙またはテープレコーダーを使用しないインタヴューであった。なぜならアダムスキ氏はきわめて早口で話し、しかも多くを語るからである。実際彼は豊富な話題を持っているので、聞く人は彼の体験や説について一冊の書物が書けるほどである。いいかえればこのインタヴューの記事は一種の〝記憶による調書〟であって、しかも私はこのUFO学の高僧にたいして不公平ではなかったと確信する。（注。ねつ造記事を書かなかったの意）もし私が不公平であったとすればそれは全く私の罪である。

私はきのうスカンディナヴィアUFO協会の大会で彼と会見した。出席者は約七〇〇名であった。この会員全部はアダムスキ氏のこんどのヨーロッパ旅行の旅費を拠出している。

事実はしばしば人間の想像する事柄とは全く異なっているといわれている。奇妙なことだがこれはほんとうだ。たぶん読者はジョージ・アダムスキについて何かを読んだことがあるだろう。彼はポーランド系米人の七十二才になる不思議な老人で、自然を愛する人であり哲学者でもある。そして他の遊星から来た人との会見に関して数種類の書物を書いている。これらの書物からしてその著者は〝自分の宇宙旅行について聴衆に納得させるために小さなふるえ声で精一ぱいの努力をしている年老いた狂人〟という印象を読者に与えていた。

アダムスキ氏よ。私はあやまらねばならない。私は間違っていた。あらゆる悪意に屈することなく堂々たる態度を示すこの人が人格者であることを私は知るべきであった。アダムスキはすらりとした人で外見は若々しい。彼の顔はきりりとして強そうで、日焼けしている。精力的で知的であり、健康でそして魅力的である。たしかに彼は自分の話と論説で人を魅惑させるすべを心得ている。そして私は米国ばかりでなく全世界の人々が彼にひきつけられるのを少しも不思議には思わなかった。

ホラ吹きではないかと？　たぶんそうかもしれない。大衆催眠術の大家ではないかと？　たぶんそうかもしれない。しかし彼の話は全く興味があり、同時に私の知る限りでは彼は自己教育をやった独学の士であるけれども、宇宙問題についてばく大な知識を持つ人である。

インタヴューの始めに私はアダムスキにむかって「少々不愉快な質問だが答えていただけますか」と尋ねてみた。彼の微笑は平静さとともに品位をあらわした。「どうぞ。それには慣れています」彼は答えた。「あなたのいっていることを多くの人は一言も信じていないという事実にたいしても慣れていますか」と聞いたら「ええ」と答えた。

『地球にはときどき他の遊星から人類がやって来るというあなたの主張にたいしてなぜ証拠を持ち出さないのですか。あなたはときどき宇宙船に乗ったといっていますが—」アダムスキ氏はさえぎった。「八回です」と彼は訂正した。「八回ほど私は宇宙船に乗りました」

「なるほど。それではあなたが円盤に乗り込んだり出て来たりする場面を新聞記者に目撃させるように金星の友人に手配を頼む機会がいく度もあったでしょう?」アダムスキ氏は落ち着いて微笑した。「一度そういう機会がハリウッドの近くでありました。しかしそこにも多くの高級将校がいて、その記事は削除されました。重要でない数行の記事が新聞に出ただけです」

「あなたの体験と似たような体験をしたと称する人が世界に少数いることを知っていますか。たとえば宇宙船に乗ったとかいう体験です。数年前私はデンマークの機械工で同じ種類の不思議な体験をしたという人に会ったことがあるのです」

「これは少しも不思議ではありません」とアダムスキ氏はホコ先をかわした。「各国語に翻訳された私の書物が自称体験者に多くのヒントを与えたからです」

「あなたが宇宙人によって選ばれたただ一人のコンタクトマンであるということに特別な理由がありますか」

アダムスキ氏は驚いてまゆを上げた。「私ただ一人ではありません。私がはじめて他の遊星から来た人と会ったときには現場に数名の目撃者がいました」

この気高く魅力ある先駆者をわれわれは容易に打ち負かすことはできない。彼の話のなかのある点を私は全然信じていないので、そのことをきわめていんぎんに話したが、彼は微笑を浮かべて黙っていた。しかし他の点では私は彼を信じている。それどころか彼は米国の権威者たちとともにある役割を演じていると私は思っている。彼は世界各国と連絡を保っていることや米国では陸軍の高官・議員連と関係を持っていることなどを率直に自由に話した。彼は米国の宇宙開発計画について驚くほど精通している。

いわゆる空飛ぶ円盤に乗って地球を観察したり訪問したりしている宇宙人の真相をなぜ地球人は知らされないのかと私は尋ねてみた。それにたいしてアダムスキ氏は、各国の政府は長いあいだ他の遊星から来る人間とコンタクトしてきたのだが、地球人全体は真相の全部を受け入れるだけの準備ができていないのだと述べた。「地球人は一遊星上に多くの宗教を持って生きています。それで・・・」と彼は質問のホコ先をかわしながら説明し続けた。そこで私は口をさしはさんだ。「もしいつか一般人が、地球は人類の住む唯一の遊星ではなくてやがて金星人などに会うことができるということが科学的に立証された事実であると政府あたりから知らされたとすれば、いったいどうなるでしょうね?」

アダムスキ氏は納得させようとするかのように手を上げていった。「むかしオーソン・ウェルズ作の〝宇宙戦争〟というラジオドラマの放送で、米国人はこれがほんとうの事件だと思い込んで大騒ぎが起こったのをおぼえていませんか」

「あれは残念なことでした」と私は同意した。「しかし真相はいつ知らされると思いますか」

「それはわかりません。私がいえるのは新時代がいままさに来ようとしているということだけです。それは人間の生活に大きな

影響を与えるでしょう。米国は金星へ人間を送ろうとしています。それがいつになるかは知りません。しかしその光景をすべてテレビで放送する計画をたてています。そうなれば多くのことがわかるでしょう」「しかし金星は・・・」と私がさえぎると「ちょっと待って下さい。現在の金星に関する測定や報告は正しいものではありません！」とここでアダムスキ氏は金星に生命が存在する可能性について長い説明をしてくれた。そして月の分析について語り、各種の切手に示されているソ連の月の裏側の写真について話した。

「あなたも月の裏側を見たのでしょうね」と聞くと彼はまじめにうなずいていった。「ええ。私は宇宙船から月の裏側を見ました。私がかつてオランダにいたとき、ユリアナ女王との二時間の会見中に月について話しました。翌日奇妙なことには私がホテルの自室でラジオのスイッチを入れたとき、私の話と正確に一致するソ連の観測報告を聞きました」

アダムスキは多くの物事をよく知っている。彼は米国製の円盤型宇宙機について語ってくれたが、それによるとその円盤にはただ一つの欠点がある。すなわち飛ぶ能力がないということだった。また宇宙飛行士グレンの宇宙飛行や観測に米国が興味を持っているとも述べた。それはアダムスキの見た光景と全く同じだったという。続いて彼はつけ加えた。「われわれは米国人が自製の円盤に乗って飛ぶ日をいつかむかえるでしょう。現在米国人がやっている研究は全然正しくありません。人間はロケットで金星に到着することはできないでしょう。電気の力をかりなければだめです」アダムスキ氏が円盤の推進法について行なった説明を詳細にここに再録する能力が私にないことを恥じる次第である。しかし私は再抗議した。「なぜ地球人は真相から盲目状態にしておかれるのですか。そしてなぜわれわれは証拠を持てないのですか。あなたは地球人に準備ができていないといい続けますが、これは失礼ながらホラみたいに聞こえますが—」

彼は手のひらを上に向けて肩をすくめていった。「宇宙人来訪問題については米政府もソ連政府も実はよく知っているのです。しかしこの二大陣営のどちらか一方が真相を発表すれば他方はただちに叫ぶでしょう。『あれは宣伝だ！』と」

最後に私はＵＦＯ問題はおそろしいほどに宗教と混同されていて、宗教団体のメンバーのなかにはこれでメシを食っている者もあるという点を指摘した。するとアダムスキ氏はまじめに答えた。「円盤は科学的な問題で宗教ではありません。私は特定な宗教を宣伝しているのではないのです。私は神を信じますし、創造者を認める宗教はどれも妥当性を帯びていると思います。しかし円盤問題に手を出す狂信者や宗教団体を好みません。最近私はドイツで講演しました。（ハニー注。これは記者の誤りで、アダムスキ氏はドイツへは立ち寄りませんでした）そしてスエーデンへ行くことになっていたのですが、スエーデンの講演は（注。そしてドイツの講演も）中止しました。これは主催者が心霊グループであったためです。かわりにローマへ行くことになっています」

「法王に会うためですか？」すると彼は再び微笑した。「さあ、どうでしょうかね。しかし枢機卿のいく人かと会うのは不可能ではありません」（ハニー注。もちろんアダムスキ氏はヨハネス二十三世と会いました）

# ソ連のテレパシー実験

C・A・ハニー

ソ連一流のテレパシー研究家の一人にレオニード・L・ワシリエフという名の教授がいます。この人はレニングラード大学の心理部長です。彼が自ら〝長距離暗示〟と呼んでいる実験は最近各国の科学者間に一大センセイションをまき起こしました。

ワシリエフのこの問題にたいする研究法は他のそれとくらべて全く異なっています。彼は脳中の生理学的な電気的変化を測定するために各種の電気装置とともに催眠術も応用しています。加うるにさまざまの幻覚を生み出す薬品を使用して多くの研究と実験を行なっていますが、これは現在米国で行なわれている実験とよく似ています。

ソ連はこの研究を重要なものとみなしていますので、モスクワとレニングラードの両方にテレパシー研究センターを建てています。ワシリエフの研究は被験者を催眠状態にするためにもはや実験者の言葉による暗示を必要としないほどに進歩しています。彼の場合は被験者を催眠状態にするのにそのことを〝思念する〟だけです。彼はそれを〝無言の暗示〟といっています。彼はあらかじめ被験者に自己の能力や実験の性質などを知らせないで遠方からこれを行なって成功しました。

最近ワシリエフはペフテレフ研究所の科学者連との共同実験で一つの実験を試みました。これには各種のヒステリ症状の患者が使用されました。

被験者は空気の入った一個のゴム製の袋を右手に結びつけておきます。そしてそれは電磁的な性質を帯びた機械へホースで連結されていて、その機械は建物内の別な場所にいる科学者連に結果を示すようになっています。この特種な型の機械はカイモグラフと呼ばれていて、グラフ上に圧力の変化を自動的に記録する装置です。被験者は実験の性質を知りません。本人はただリズミックな運動で空気袋を押しつけておりさえすればよいのだと思っています。すると本人が袋を押しつけるたびにカイモグラフは隣室にあるグラフ上に空気の圧力の変化を記録します。

任意な時刻に隣室のワシリエフは被験者にたいして「眠れ」という命令を思念してその想念を〝送信〟します。この時刻は記録されて、一定の時間がすぎてから「目覚めよ」という命令が送信されます。すると「眠れ」という命令が放たれると袋を押しつけるリズムが中断されることをカイモグラフの記録が示し、「目覚めよ」という思念が送られると袋のリズムは再び始まります。この実験は二六〇回中九〇パーセント成功でした。このテストの結果として科学者連は、催眠術は心の暗示すなわちテレパシーにすぎないと結論づけました。

その後の実験では精神的な障害のない被験者を応用して、ワシリエフは他の室内にいる被験者たちにかなりの量の知識をテレパ

シーで伝達することができました。ワシリエフによるこの研究の結果、いまやソ連は宇宙開発計画にテレパシーを応用する可能性を引き出すほどに大がかりな研究をやっています。つまりテレパシックな方法によって宇宙飛行士に指令するかまたは教えることができると彼らは考えています。

これの明白な長所の一つは、テレパシーには時間と空間は関係しないという事実です。普通の無線通信の場合と違って、長距離通信に時間のズレが起こりません。これはテレパシーが電磁波のような〝光速〟という制限を持たないでいかなる距離にも到達し得るためです。

ソ連または米国の見地からしますと、テレパシーの別な長所は完全に異なる言語または文化を持つ民族へ〝考え〟を伝達できるという点です。テレパシーを用いるのに相手国の言語を知る必要はありません。両方がテレパシーに熟達していれば相手の言語を知らなくても〝思考〟の交換ができるのです。

米国でもこれと同様の研究が行なわれています。各種の団体がこの線に沿って実験をしていますが、著名なのはメリーランド州のベセズダにある海軍研究所です。

アダムスキ氏と私は各種のサイレンスグループから送られる〝精神的な影響力〟について述べましたが、これもやはり一種のテレパシーで行なわれます。過去の時代にはこの種の影響力は〝魔法〟と呼ばれていて、その多くはヴードゥー教の儀式で応用されています。アダムスキ氏がヴードゥー教や魔法について語っているとき、彼はこの種の精神的な影響力のことをいっているのです。詳細はいずれ本誌に載せることにします。

## TOPICS

### 大変動発生とケイシーの予言

偉大な霊能者であった故エドガー・ケイシーの予告によれば遠からず世界に物理的な大変動が発生するはずだということになっている。そしてこれは現在米国のある一流大学の著名な地質学者によってすでにそれが始まっていることが確証されている。

著述家ジェス・スターンズの最近の著書〝未来へのドアー〟によれば、この大変動にはニューヨーク、サンフランシスコ、ロサンジェルス、その他の大都市の壊滅が含まれている。

ケイシーは地球の自転軸が次第に傾いてゆくことを予言した人で、それがひどく進行すると世界中に大破壊を生ぜしめるという。

一九六〇年に国際地球観測年の研究が始まったとき科学者連はこれを立証して、この有名な予言者の言葉に注目し始めた。

ケイシーによれば、数十年以内に現在セント・ローレンス河と北太西洋に流れ出ているグレイト・レイクス（注。カナダと米国の境にある五大湖。このなかにはオンタリオ湖やミシガン湖が含まれている）はメキシコ湾にそそぐようになる。「数千年もたてば地軸が完全に傾くことはよく知られている」と右の地質学者はいった。しかしケイシーはグレイト・レイクスの北側沿岸にそって地殻の隆起の速度は突然に急速になってくるだろうと予言した。

世界はケイシーの予言が正しいか誤っているかを知るのに長く待つ必要はないだろうと著者スターンズは書いている一九五八年

から一九九八年のあいだにニューヨークの破壊以外に次のような異変が起こるだろうとケイシーは予告している。

「地球は米国の西部で破壊が起こるだろう」

「日本の大部分は海底に沈下するだろう」

「ヨーロッパの大部分は一瞬にして変化するだろう」

「新しい大陸が米国の東海岸に出現するだろう。そこにはかつてアトランティスが文化の象徴として存在していた。そして太平洋のかつてレムリア大陸が繁栄していたあたりにも新しい土地が現われるだろう」

また彼はこの線にそっての最初の予言後数年してから、ニューヨークのメインランドはマンハッタンよりも安全だろうといった。

スターンズは一九六〇年度の英国のある科学雑誌から氏名を秘したままで例の地質学者の説を引用している。

「海底の地盤のすさまじい隆起が深浅測量の結果判明した。ある水域では水深が以前は千二百フィートとなっていたのに四十五フィートに変化していることがわかった。海岸から九マイルの沖合のある地点では、水深四千五百フィートという従来の測定にかわって千二百フィートになっていることが新しい測定でわかった。

ところでケイシーによれば（地震と津波に関する彼の初期の予言はイヤになるほど正確であったが）、水中から最初に姿を現わす土地は大昔のアトランティスの一部で、これは一九六八年ないし六九年である」とスターンズはしるしている。

この海底隆起の最初の徴候はイタリアのエトナ山付近に起こる一連の地震であろうとケイシーはいった。これについては米国地震学会が一九六〇年七月にエトナ山が現代においては原因不明の激烈さをもって大爆発を起こしたと報告した。

数章にわたってスターンズはすばらしく興味ある話題を提供している。彼の考えとケイシーの予言は現在優勢なある一派の地質学上の説と一致しているように見える。その一派がとなえるところによれば、地球はかつてその表皮の内部が動いたことがあるという。これはちょうどミカンの表皮全体がたるんだ場合に中味がうごくのと同じである。この派の科学者連はいう。これがまさに現在地球に発生しつつあるのだと。スターンズによれば、古代において寒冷な気候のなかに動植物が住んでいた証拠が南太平洋の島々で化石となって発見され、また北極地方で熱帯性の動植物の遺物が発見されることがあるが、これは右の説を裏付けるものだという。

〝ザ・シックス・マン〟、〝ザ・ウェイステッド・イアーズ〟などの書で知られるスターンズは、この他にも予言者として名高いワシントン市のジーン・ディクスンなどを紹介している。（レジャータイム誌一九六三年二月三日号より）

## 生命を維持する六億の遊星

米航空宇宙学会がきょう語ったところによると、銀河系のなかでも知的な生命を維持する遊星が六億はあろうという。

コロンビア大学のロイド・モッツ教授は科学者と技術者から成る聴衆に講演して、銀河系中の二億の恒星のおのおのはわれわれの太陽に似ていて、この太陽系と同じくらいかまたはより大きな太陽系の中心をなすものであろうと説明した。（三十二頁へ続く）

## 誌友通信

東京　T・W

御親切な日本GAPニューズレターの御郵送、誠に有難う存じます。これが来るのは非常に大きな喜びです。日本において最も真実味のあるマガジンだと考えます。〝土星旅行記〟は実に素晴らしい体験記で、早速男女の友人にも見せました。私と知り合う人間は多かれ少なかれ磁気のことを耳に入れていますから、土星の乗物についても磁気的装置と推測するようです。ただ花でできた道というのには大いに感嘆しました。また街道を色彩で区別するとは多分に芸術的です。というのは緑色街道は緑色の花で占め、青色街道は青色の花で占めるとなれば、色の明度彩度に交通上にも役立つほどに高度の配慮がなされていると思われるからです。優秀な土星デザイナーの手で設計されたものと思います。

その後磁気について研究していますが、根本は宇宙の〝気〟にあるようです。気の統一動が磁気であり、気の螺旋動が電気であり、気の動き（気動）は常に鼓動性（周波性）をもち、音・色・熱・臭・味・神経の原理は周波気動にあり、低周波気動は分散性で高周波気動は指向性でその極限が精神波動のように考えられます。ではお体大切にして下さい。

和歌山市　土永芙美夫

ニューズレター有難う御座いました。タイプ印刷はなかなか大変なお骨折りのことと存じますが、この度は一段と充実した内容、実にうれしく拝見させていただきました。御努力ただただ感謝の外ありません。ことにアダムスキ氏の生命の科学には深く心引かるるものがあります。この講座もいずれ本誌にのせて下さることと存じますが、いつ頃になりましょうやら待ちどおしい限りです。またハニー氏の〝心霊的な詐欺行為〟、実に興味深く読ませていただきました。多年心霊科学のオトリとなっておりましたため、当初はなかなか合点が参らず、かなり迷いましたが、お蔭様で心霊科学的先入感もこの頃ではすっかり払拭できましたことをうれしく存じます。

ところで去月（六月）二十八日金曜日の午後七時半頃と覚えていますが、テレビのボクシングに夢中になっておりましたところ、どうも円盤来訪のような気が致しましたので、急いで裏の空地に出て見ますと、何時もと同じ高度にやはり一機滞空しておりまして、大声で隣家の人々を呼び、約五分間ながめました。

円盤は実にゆっくり市の上空、私からやや北よりを西から東へ飛行し去りましたが、この間隣家の人たちがかけつけ、私が指さしながら説明を始めていますと、円盤は数回約十秒程度左右にゆれているのがはっきりと目撃できました。

神戸市　巽　直道

ただいまニューズレターがつきました。一気に〝土星旅行記〟を読ませて頂いたところです。他はまだです。中岡先生が法光寺よりおこしになっており、今レターをむさぼるように読んでおられます。中岡先生がおこしになっていますのは私たちはいよいよ東京に進出することになったからです。十年目にして念願がかなったわけです。明後二十一日夜神戸をたって上京、二十二、二十三、二十四日の三日間新宿で講座を持ちます。中岡先生と今話したことです。「私たちもニューズレターをよりどころとして、会

員にもっと宇宙に目を向けるように講義してゆこう」と。大変な感激をもって読ませて頂きました。何回もくり返して読みたいと思います。

東京　栗原　健

ニューズレター5・6月号拝受。〝土星旅行記〟は興奮を禁じ得ぬ記事です。これが現実だと信じても信じない人が多い世の中では信ずる人は笑わるべき者となるでしょう。その他種々の個所に秘機に類する事柄があるように見受けられました。地球の運命が大きくクローズアップされてきてその運命が破局に向う趨勢の方が大きいという点で良心ある人は寒心に堪えぬところでしょう。地球の大地を削り大気を汚染する現代の地球文明そのものが反宇宙的作業の産物であるとの信念を確立させますが、ここで新しい意味で回天の業という事が宇宙人の英知によって開始され、心ある地球人がこれに参画しなければいけないその方向に結集された運動が必須となっている事を痛感します。

現代文明へのかかる根本的な批判とそして否定をもちながらしかも現代に生きてゆかねばならないということは、まことに苦汁をなめての四六時というものです。〝現代〟という怪物が都会を、産業を、社会を吹きまくって、それと斗わねばならない運命の子らに新しい生命の息吹きを与えられんことを祈ります。貴殿の献身的なお仕事に深く敬意を表します。暑中ご健康を祈ります。

武蔵野市　飯田義郎

GAPニュ1ズ5・6月号拝受しました。毎号素晴らしい内容により大いに啓発されています。まことに感激に堪えません。その都度通信したいとは思いながら多忙のため怠っていましたことを深く御詫び致します。今回のア氏の土星訪問記は誠に驚異的な素晴らしさと申しますか内容は実にわれわれ地球人にとって由々しき大問題の提起であります。従ってわれわれは今後如何に生くべきかという点で正直なところ消化しきれないで困っています。中でも聖書とコンフリクトする点です。それについても〝宇宙哲学〟を是非よく読みたいと願っています。

編集後記拝見、いよいよ邦文タイプを入手されて御自分でヤラレル由、御蔭で明瞭なタイプ活字によって大変読み易くて助って居ります。なお今後印刷機まで手を延ばされます由、日本GAP代表として単身の御献身に満こうの感謝を表明します。

香川県　松島吉男

このたびはまた内容あるニューズレター5・6月号御送り下さいまして誠に有難う御座います。ほんとうに毎号御送り下さいます御親切には感謝の外ありません。そしてこの内容はわれわれ人類のすべての人々が知らねばならぬ事で満ちていることが分るのです。「かくて福音はすべての国人に伝えられん」と、この通りと思われます。それにしても一般の人々は無関心です。これがわれわれの世界の人々の悲しむべき現実であるのです。

次に最近私に感じられたことについて述べさせて頂きます。何かの御参考にもなると思います。「来たるべき大転換とその後の時代について」と見出しは大きすぎるかもわかりません。（注。以下長文のために省略いたします）

その後は大変御無沙汰いたしまして申訳ありません。今月のニューズレターのとどけられるのを首を長くして待っていましたところ先日御送付を頂き誠に有難う存じました。先般は御丁重に御返事を頂きこれまた貴重な御感想に接し、参考とさせて頂きましたが、最近はどうも色々と雑用に追われて御手紙を書きませんでした。あしからずお許し下さい。

この処従って円盤問題とは遠ざかって居りました。前にお知らせしました目撃以来まだ円盤に接しませんのは遺憾ですが、ここしばらくは生存競争のゴミ溜めの中に心身共巻き込まれている感じですが、いずれはまたそこから脱出することと思います。

今月のニューズレター、内容は誠に興味深いもので、大いに検討して知識を吸収する必要があると思いましたので、出勤時もいつも持ち歩いています。〝土星訪問記〟は申すまでもなく最も参考とする資料ですが、他の二、三の記事はなおそれに勝る注意を払う価値があると存じます。

和歌山市　片野純而

私はいま入院加療中で、ニューズレターを熟読しています。G・アダムスキの〝宇宙哲学〟がいずれ出版になることを強く願っています。聖書もアダムスキ氏が書きなおして出版されたらうれしいのですが！。私は自分の言葉が相手を喜ばせると相手の肌が乳白色になり、いやがらせるとこのハガキの色の顔（ことに目のまわり）になります。また私は先生の協力者となって共に仕事できたらと夢想しています。

深谷市　高橋　史

# アダムスキ氏からの手紙

クボタへ

あなたの深切な手紙を受けとりました。私も日本を訪問できないことを残念に思います。訪問できればそれはきっとあなたとそのグループの方々に大きな助けとなるでしょう。今回のヨーロッパ旅行で私が訪れたのは人々のためであったからです。旅費ができれば必ず日本へ行きましょう。

ヨーロッパ旅行は大成功でした。ヨハネス二十三世にも会いました。彼の後継者は宇宙人問題に関するヨハネス二十三世の計画を続行すると思います。私が手渡したメッセージの結果を知るにはあと一年かかるでしょう。しかしそれまでにヴァティカン公会議で宇宙人問題について何かが発表されるはずです。ヴァティカンが宇宙人問題の一部を支持すれば世界中の教会はその問題を語ることになり、これは私たちの真理のための長い戦いで勝利を得ることを意味します。

ハンス・ピーターセンはいずれ刊行物を出しますが、これには多数の質問にたいする回答とともに未来にそなえて大グループを結成する方法が述べられています。それは私たちの計画の指導書となるものです。

あなたと日本のGAPグループの多幸を祈ります。

一九六三年七月九日

ジョージ・アダムスキ

## ハンス・ピーターセンからの連絡

これまでみなさんはアダムスキ氏のヨーロッパ旅行がいかにうまくいったか、当地ではどうであったかなどについて知りたいと思っていたことでしょう。

ご存知のように、アダムスキ氏はスカンディナヴィアＵＦＯ協会から招待され、協会はア氏がヨーロッパへ旅行するのを実現させました。

アダムスキ氏は四月二十九日にデンマークへ来て五月十五日に出発しました。もとの計画ではドイツ、フィンランド、スイス、イタリア、英国を訪問する予定でしたが、デンマークに滞在中、フィンランドとドイツはある事情で中止されました。これはいつか公表されるでしょう。

デンマークでは大成功でした。アダムスキ氏は多数の人に会って話しましたが、ただ一人の否定論者にも会いませんでした。彼はデンマーク国営テレビの五分間の紹介放送に出席しました。テレビ関係者はあたかも外国の高官を迎えるかのように空港に出迎えて放送局のインタヴューにも案内しました。

彼はスカンディナヴィアＵＦＯ協会主催の大会で七〇〇名の会員に講演し、そこに滞在中は毎日人々に会いました。

ベルギーで彼はヨーロッパの各国ＧＡＰリーダーに会いましたが、その結果はまだよくわかりません。彼は早く全リーダーに知らせたがっているように思われますので、直接に連絡文書を発送するでしょう。

彼は私に例の大会の模様を全リーダーに知らせるようにと語りました。これはなるべく早くしたいと思いますが、あと二か月かかるかもしれません。それは少なくとも百ページの刊行物になるはずで、この刊行物によってある新しい〝計画〟が示されることになっています。

右の刊行物はＧＡＰの運動に関心を持つ個人またはグループにたいする忠告として役立つでしょう。関心を持つ人ならだれでも入手できます。それはわれわれが真相をもっと容易に広めるのに役立ちます。忠告を要約すれば次のとおりです。「われわれが知っている円盤問題の真相を神秘主義、宗教、政治、金もうけなどと結びつける人を受け入れてはいけない。それゆえ、われわれの運動には正当な人だけを入れるようにされたい」

スカンディナヴィアＵＦＯ協会はＧＡＰの諸計画が正しいことを証明しています。そしてまもなくヨーロッパ各国へこの〝計画〟をひろげるための手を打つことになっています。もちろん、アダムスキ氏の各国協力者が右の忠告に従って協力することを望むならば要請されるでしょう。

世界中に一つの活動の進路を持つことが必要であることを過去はわれわれに示しました。

右の忠告に従うことによって今日見られるような真相のわい曲は不可能となります。それゆえこの新しい〝計画〟はわれわれが

何かの援助をしようと思うならば必要なことです。過去十五年間になされてきたことはあまりに小さすぎました。

新しい〝計画〟は私の刊行物ができたときに始められるはずです。一方ハニー氏のニューズレターもそれを援助します。

その計画が始まるまで私はすべての真実の友—どこに住んでいようとも—に、この計画にたいする準備をしておかれたしとお願いしておきます。

ヨーロッパの友にたいしては次のように申しましょう。「決心しなさい！ 時は近づいています。責任は私の肩にかかっていますので、計画を実行する方法はいずれ私に知らされるでしょう」アダムスキ氏はこれまでたびたびいっています。「反対派の抵抗はますます強力となり、デマは大きくひろがり、敵はこの最後の時代に自己の個人的な私欲のために戦ってくるだろう」

われわれはアダムスキ氏が世界にもたらした真実のために戦っています。反対派の声に耳をかたむけないようにして下さい。アダムスキ氏や氏を支持する多数の人は世界をよりよい状態にするのを助ける仕事をやっているのです。周囲の目から見ればわれわれ個人は全く小さな存在にすぎませんが、団結するならば強大な力になります。団結は事をうまく運ばせるでしょう。一人が去って行こうとも、喜んで参加しようとする多数の人がいます。

アダムスキ氏によって与えられた真相は広範囲に全世界にひろがりましたので、来たるべき新時代を反対派のために遅らせてはなりません。重要なのは、いわゆる円盤問題は宇宙的な計画なのであって、遠い昔に準備されたこの計画を少数の人間の妨害によって台無しにさせてはならないということです。

あなたは〝家族〟に属していますか

状況がどのように進展してゆくかについてはお知らせし続けましょう。また刊行物の発行日についてはもっと詳細にお伝えしましょう。

それまで私は次のように申しましょう。「忍耐強くして準備をしていて下さい。ヨーロッパに住む方は前記の〝計画〟に協力できます。ヨーロッパ以外の地に住む方はこの〝計画〟をとり上げて実行にかかって下さい」現状ではこれだけしかいえません。ヨーロッパ各国でいかなる事態が起こっているかについて私はよく知っています。あなたが右の〝計画〟に賛同するならばあなたはすでにその〝計画〟の一部です。それに反対するならば実際には道ばたへ脱落してだれかがひろってくれるのを待つことになります。バスはすでに走っています。われわれはみなキップを持っているのです。それゆえ各自は自己の座席を確保して進行路線の各停留所で会おうではありませんか。このバスはこれ以外の進路を進みはしません。そして待ってはくれません！

（注。ハンス・ピーターセン空軍少佐はデンマークのスカンディナヴィアＵＦＯ協会の代表者で、デンマークＧＡＰリーダーとして活躍していますが、特にア氏の四、五、六月にわたるヨーロッパ旅行を企画してデンマークで大成功させた人です。以上は最近彼から各国ＧＡＰリーダーに送られた連絡文書です）

# 土星旅行記 —2—

G・アダムスキ

私の土星旅行についてこのたび第二部を公表する許可を〝宇宙の友〟から与えられましたので、ここに発表します。

まず私が乗った宇宙船のスピードに関して質問を寄せられた方々に次のようにお答えしましょう。乗っているときに私が受けた感じをわかりやすい言葉で説明できるかどうかわかりませんが、とにかく最善をつくしてみましょう。宇宙船は地球を出発して九時間後に土星に着陸しました。あの遠距離を考えてみればこの九時間というのは信じられないように聞こえるかもしれませんが、どうしてそれがなされたかについて説明してみたいと思います。

意識的な想念のスピードには限界がありません。土星へ私を運んでくれた宇宙船は意識の法則と同じ原理を応用して建造されています。ひとたび地球の大気圏外へ脱出するとこの宇宙船は人間の意識的な想念と同じ作動原理にもとづいて動き始めます。意識的な態度をとるのだといってよいでしょう。その場合、船体を作りあげているすべての分子や原子が一つの奉仕—すなわち目的地へ人体を運ぶという奉仕のために結集した実体となります。人間の知っている時間というものは関係ありません。行こうとすれば全く瞬間的に行けたかもしれないからです。あの場合は私たちにこの特種な法則を知らしめるためと、—私たちが持つことになっていた体験にからだの調子を合わせるためにわざと時間がかけられました。

私が説明しうる限りでは、この法則はある光景を描く画家に似ていて、鑑賞者がその作品を見るとき絵の具やキャンヴァスの存在を知っていながらも、その絵があたかも生きた光景であるかのごとく感じるほどに自分がそのなかに没入させられるのと同じです。私が乗った宇宙船はこのような法則のもとに作られていて、あらゆる分子や原子を作りあげている無数の実体でもって建造された一つの生ける実体ともいうべきものです。

この体験は私に一つの事柄を説明しました。それは〝天使の翼で運ばれる〟という表現で意味されるなにかです。その宇宙船は他の宇宙船と同様に固体の物体であって金属でできています。そして流星に出会えばそれを避けることができます。

私たちが船内にいたあいだは読者がこの記事を読んでおられるときと変わりない正常な状態にありましたが、肉体は軽くなったような気がして、言葉であらわせない感じ——永遠の安らかさといった感じを体験しました。地球から遠く離れたという距離感や奇妙さもありませんし、私の心は微妙な手でいたわられているという感じを私に与えました。しかし私はからだの内部に起こってくるある変化に気づきました。あとで知らされたところによりますと、私のからだの分子が一体化の感じを起こしたのだというこ

とでした。また無限の宇宙空間を進行するその宇宙船を外部からながめたならば、私はその船体がただの一個のきらめく星だと思ったことだろうということも知らされました。船体はそれほどまでに輝いていたのです。

これは宇宙の万物を動かし支えている宇宙の法則とエネルギーを応用した宇宙船です。この宇宙船の実際のスピードを数字であらわすことはできません。というのはこの型の宇宙船は非常な遠距離にある太陽系へ行くために主として用いられるのであって、緊急事態が生じない限り一太陽系内の遊星間に使用されることはめったにないからです。内部のあらゆるものが優美きわまりなく、受ける感じは筆舌につくしがたいものがあります。

パイロットたちでさえも普通の状態ではありませんでした。なぜなら船内にはあらゆる型の装置がありましたけれども、それらもパイロット自身の意識に服従していたからです。

一同が土星に着陸して船体を見たとき、それはきわめて微妙な生き生きとした色で輝いていました。そして降りた人たちがたがいに見合ったときもだれもが同じように輝いていました。一同は船体にあるのと同じパワーを浴びていたのです。しかし一時間ばかりしてからその輝きは消えてしまいました。

## 地球の過去を知らされる

この旅行記の第一部で私は着陸後の手順と会議が開かれた建物について説明しました。私のテーブルについた人たちに関してはすでに述べましたが、別に十二個のテーブルがあったことは書きませんでした。この各十二のテーブルには一つのテーブルに一人ずつ十二人の偉大な人たちがついていて、その人たちと一しょに各遊星のリーダーがすわっていたのです。この偉大な十二人とはかつて地球上で救世主として知られていた人々です。

ここで読者は尋ねるかもしれません。「あなたと一しょにいた偉人はだれであったか？」と。その人は十二人の代表者なのであって、すべての意識的意識の一体化した人でした。地球でならばわれわれはこのような人を創造者の意識として分類し、〝キリスト（救世主）〟と呼ぶかもしれません。しかしこれはイエスを意味するのではありません。イエスは一人間なのであって、〝キリスト〟とは意識的意識または宇宙の意識であるからです。一個人としてのイエスは自己の肉体を通じてこの意識を表現するように自身を訓練した人なのであって、これによって彼は次のようにいうことができたのです。「この世の肉体人間としての私は創造者と融合している。それゆえ私は〝父〟と一体であるということができる」

そこに出席していた〝救世主〟たちのすべてはかつて地球にいたことがあって、そのおのおのは真実の生き方を示すために一つの目的をもって来たのでした。彼らが訪れたのはこの地球ばかりでなく、火星へも行ったことがあるということでした。地球と同様に火星もその遊星上に存在した多くの文明を破壊したことがあるのです。実は地球へやって来て地球人に戦争というゲームを教えたのは火星人でした。現在火星人は地球人よりもはるかに進化して戦争という点を克服していますが、またさほど進歩していない面もあって、事あれば防衛態勢にたち返るかもしれません。彼

らはそうするべき立腹の原因を持たざるを得ないでしょう。一方金星や土星にはこんな傾向はありません。火星は金星や土星と違って一方のホオを打たれても他方のホオをさし出すことはしないでしょう。

約一万年前に多数の進化した金星人が当時地球で行なわれていた火星人の慣習に反対するために地球へ移住して来ました。そして人類の進化の方向へその慣習のいくらかを変えさせることに成功しました。実際この太陽系内の各遊星から来た人々は地球上に定住し、地球人を支配するためにたがいに戦ったのです。戦争を否定した人たちはそうでない人々によって殺されました。そのなかには金星人が含まれています。

このようにしてさまざまの主義が混ざり合い、地球上に混乱がひろがり、それ以来多種類の神々が礼拝されてきました。これが他の遊星の人間が地球人のあいだにまいた悪を正すために現在地球に関心をそそいでいる一つの理由です。これはまた、地球人は他の遊星の人間を尊敬しそれに奉仕しなければならないという考え方にむかって古代の訪問者たちが地球人の想像力をあおりたてたときにこの地上に残された誤った物語をなくすために多くの救世主がやって来た理由でもあります。

## いかにして地球は裏切られたか

はるかに遠い昔、この太陽系中の三つの遊星だけが地球人を裏切りました。それは水星、火星、木星です。木星人は木星こそ宇宙の神の住み家であるという印象を残したのですが、これは誤っています。こうして神話においては木星は神の星として知られていました。

土星は悪魔の星とみなされていましたが、これは木星から来た人々がウソを教えたのです。土星は審判の星です。遊星間のこうした不和は長いあいだ続き、争いのほとんどは右の三つの遊星によって起こされました。

火星は宇宙船を最初に開発した遊星で、この宇宙船は太陽系内のバランスを破るために同盟遊星群とともに使用されました。しかしこの五千年間だけは三つの遊星によって修正が試みられています。

地球人を訪問者の意のままにするために、空想的なものにすぎない〝悪魔〟というものがどのようにして導入されたかについて例の会議で説明されました。前記の三つの遊星の人間すべてが〝来訪者〟たちと調和したわけではありませんので、そのためにすさまじい見解の相違が生じました。ちょうど今日地球の各国間に見られる状態と同じです。それ以来地球人にとって一つの実体になった〝悪魔〟が宗教的な分子によって恐怖の手段として利用されてきましたが、これはその分子の指令に従わせるために信者を抑圧するかまたは懲罰するためです。

始め人々はこの懲罰法を問題にしなかったので、宗教の指導者たちは従わなかった人々のために〝地獄の罰〟を設けました。この地獄というのは地下ではなくて天空にあり、その場所として彼らは水星を想定したのです。当時地球では太陽が熱いと考えられたように水星も熱いと考えられたので、水星上のものはみなにえたぎっているにちがいないと思っていました。これによって〝地

獄の火の責め苦〟という概念が生じたのです。人々は太陽が地上に熱を生じさせることを知っていたため、このことをきわめて簡単に信じました。〝地獄へ落ちる〟という言葉が用いられたとき、それは人がもとの信仰からはずれてしまい、それによって罰を受けるという意味を持っていました。

もちろんこんなことはみな間違っていますが、今日までもその言葉の持つ目的は生きています。実際には地獄というのは人間が生命の法則（宇宙の法則）に反して生きることによって作り出すものを意味するのです。

右の誤った考えが人間に示されて以来ずっと創造者と悪魔とのあいだの戦いが続いてきています。これはまた大昔に地球人を裏切った〝堕落天使〟の意味でもあります。しかし近代においては次第に光明にむかい、人間は生命の真実の生き方の意味を求めて自然を直視し始めています。それはこの生き方こそ創造者の真の表現であることを人間が知っているからです。

## 自然の法則のすべてを人間はどのようにして学ぶか

大気圏外へ進出することによって人間は他のいかなる方法によるよりも早く自然の法則を知るでしょう。自然は決して休息していないで絶えざる再生の状態にあります。人間もこの絶えまなき創造の過程のなかにあり、だからこそ「いつか人間の完成があるのだ」と感じるわけです。しかしこの〝真実在〟が自分のものになる前に、人間は過去におけるよりもはるかに急速に来るところの多くの変化を体験するでしょう。特に人間がひとたび生命の法則を理解し始めるときはなおさらです。それはこの瞬間こそ人間がすでに生命の新しい周期に入り始めているからです。もし人間がこの周期に入ろうと努力するならば、それは人間に思いもよらぬ報いをもたらすでしょう。人間は誤りのかわりにあらゆる生命にたいする自己の関係という事実でもっておきかえることになり、かくて自分と創造者とは一体であることに気づかねばおられぬようになるでしょう。

知識と知恵の部屋はいまや人間のために開かれています。しかし未来にたいする信念が人間の基礎でなければなりません。遠い未来が人間に何をもたらすかをだれも知らないので、このことはある人にとっては盲目的な信念だと思われるかもしれません。しかし人間はその段階に到達するまではわかりはしないのです。それゆえ永遠への路上で人を案内する人たちにおいては信頼と確信とがその信念の一部でなければなりません。

この過程を経るとき人間は多くの不愉快な出来事に直面するでしょうし、ある場合は苦痛さえ伴うでしょう。そのとき人間の自我や個性はそれ自体が作り出した多くの物を捨てなければなりません。これは容易なことではありません。永遠のせまい道を歩むには強固な信念を必要とするからです。現在の状況からみますと多数の人がこんなことで努力をしたり、変化するために積極的に強さと信念とを持ったりはしないでしょう。

個人が自己の思考力を支配させてしまった地球のもろもろの束縛は存在の権利を要求するでしょう。その結果、自然の法則と非自然の法則とのあいだの戦い、または過去の習慣と未来の真実とのあいだの戦いが展開しています。バビロンはいまやその土台の

上で揺れ始めていて、偽りの神々の名がいたるところで聞かれます。神々の破滅の日が近づいているからです。しかしいつかまたこの神々は一つの力となって地上に出現し、多くの人はひざまづいてそれを拝むでしょう。なぜなら個人の私有財産が自ら生き残るために保護を要求するであろうからです。

人間が主人であるかわりに誤った創造物がこれまで人間の主人でした。しかし人間はいまその支配力をとり返しつつあります。弱い人は道ばたへ脱落し、強い人はかつて人間の生活につきまとっていた〝虚偽〟を屈伏させて勝利を得るために前進するでしょう。

砂のあらゆる粒が影響を受けて永遠の過程のなかで自らをその創造者のイメージの型にあてはめるでしょう。以上が土星の会議で出席者に与えられたメッセージです。

## 宇宙船内でレッスンを受ける

土星旅行から帰って数週間してから私は再び〝宇宙の友〟に会う光栄に浴し、彼らの〝自動車学校〟で一定期間の激しい訓練と授業とを受けました。この訓練というのは、われわれの時代の真の状態がいかにして説明されるべきか、そして生命の真実在を望み、真自我を求めて自我を喜んで捨てようとする人にその真の状態がいかにして与えられるべきか、という方向に努力をそそぐためのものでした。永遠性を確立するのはかかる真の状態によるからです。

〝自動車学校〟といっても私が乗ったのは巨大な宇宙船で、それには創造の法則の実際の作用の例証として最新式のあらゆる装置がしてあります。現在および未来において必要なすべての物がこんな宇宙船内に設備してあって、物事の結果は創造の法則を利用することによって得られるものであることを示していました。また私は人体のいかなる部分に創造の法則が働いているかも教えられました。この知識の多くをまだ一般へ公開することはできませんが、新しいものにかわって古いものを投げ捨てようと心から望んでいる少数の人には公開されるでしょう。

この宇宙船は地球から五千マイル以内の位置へ来て、地球に関して宇宙空間で静止して、そのあいだに授業が行なわれました。船内には多数の学生と教師がいて、十八時間の徹底的な学習が与えられましたが、いかなる種類の倦怠をも感じる人はありませんでした。残りの二時間は身体の運動にあてられ、あとの四時間は自由時間です。これはいく日も続きました。

これと同様なレッスンがいずれまた行なわれる予定です。しかしこれに参加できるように心配してみてくれと私にお頼みになるのはご遠慮下さい。人選は〝宇宙の友〟によってなされるからです。彼らが地球人中から参加者を選ぶのですから、私はこの件では何もいう資格はありません。

私は読者から次のような質問を受けました。「宇宙哲学の知識は書物によって得られるだろうか」答は「イエース」ですが、質問に直接答えて問題を討議できる教師につくほうが早く理解できます。書物による場合は、研究する事柄の一部を読んだあとでその印象を書きとどめることは助けにはなりますが、日常生活でそれを応用することは教師につくことができない人にとって最上の

方法です。

もし行なおうとするまじめな研究にたいして自分自身を捧げるならば、人は教師について研究することによってより早く進歩します。しかし何よりもまず信念を持ち、教師に信頼を寄せねばなりません。たとえ地球人のすべてが誤ちをおかしやすいとしてもです。研究者は自己の研究から何かを得ようとするならば、その誤ちであわてたりしてはいけません。

研究者は進歩してゆくあいだにきっと多くの誤ちをおかすでしょう。自分が修正される必要があるでしょうし、修正はときとして不愉快かもしれません。しかしこのことを理解した上で学ぼうという決意があるならばそれはゴールに到着する助けとなるでしょう。教師とともに座すことがあらゆる研究者にとって可能であることを私は願うものです。そのとき彼らは急速に成長するからです。

長いあいだ私は教えてきましたが、そのあいだ一研究者の進歩してゆく実例を見ています。私の弟子たちはタイプライターの操作やその他の仕事をやってきました。彼らは私の留守中にも仕事を遂行できる理解力を身につけていました。しかし重大な時がやってきて、彼らが以前に持っていた信頼と信念にかわって疑惑が忍び寄ってきました。これが起こったとき、人間の進歩について何もわかっていない外部のグループから情報が探し求められて混乱が発生しました。

こんな場合研究者は通常それまで得ていたものすべてを失います。そして彼らは日常生活のきまりきった混乱のなかへ退却してしまいました。おそらく彼らは二度と同じ好機を得ることはないでしょう。環境が人間の主人となっているからです。

もし読者が通信講座にせよ直接にせよこの深遠な研究を行なおうと決意したならば、何が起ころうと問題にせずにゴールにむかってタマを打ちまくる決心が必要です。そして生命のすばらしい奥義について何も知らない他人の意見に耳をかたむけないことです。

もしどうしてもこれを行なうことができないならば、あなたは現状のままにとどまるのがよろしいでしょう。なぜならこの態度（断固たる決意を持った態度）が保てないならば、あなたは混乱の生命以外の何物をも得ないからです。これまでに与えられたいかなる教えとも異なるこの新しい深遠な研究を行なう場合は特にそうです。

：　　：

（二十一頁より）モッツは次のようにいった。「地球はこの太陽系中で高度に発達した生命を持つ遊星であるけれども、金星と火星も少し異なる条件下にやはり知的な生命を持っているかもしれない。

直接の証拠はないにしても、いまやほとんどの科学者はこの太陽系以外にも生命が存在するのを当然のことと考えている」

ケァリフォーニア州パロアルトのヒューレット・パッカード社のバーナード・M・オリヴァー博士は、他の遊星の知的な生命を探して宇宙空間の彼方をさぐるためにラジオコードを用いる方法について検討した。（アナハイム・プレティン一九六三年一月二十四日付より）

# 編集後記

◎ 早いものでして、この〝日本GAPニューズレター〟を一昨年九月に発行し始めてからこの号でちょうど満二か年になります。当初は十数名の方を対象にガリ版の粗末な会報を出していましたが、おかげさまでいまはタイプ印刷となり、会員もかなりふえました。その間熱心な誌友の方々から絶大なご援助をたまわりまして厚くお礼を申しあげます。

◎ アダムスキ氏から〝土星旅行記〟の第二部と私信が来ましたのでそのいずれもこの号に載せることにしました。手紙のほうは「日本へ来る計画があるか」という私の質問に答えたものです。おわかりのように彼は「旅費さえできれば—」といっていますので、会員中の有志の方々とはかった上、来年八月を一応の目標にしてアダムスキ氏を日本へ講演旅行に招待する計画をたてました。そのために〝日本GAP〟をもっと組織化する必要がありますので、目下具体策を練っています。よきアイデアがありましたらお知らせ下さい。

◎ 〝ハンス・ピーターセンからの連絡〟には重要な意味が含まれているように思われます。この記事中に〝計画〟という言葉がしきりに出てきますが、これが何を意味するのか編者にもまだよくわかりません。しかし〝質疑応答〟中にアダムスキ氏がメキシコかどこかへ米国GAPメンバーの〝集団移住〟を考えていたこととその責任者にデンマークのピーターセンがあたることなどの記事を見ますと、何か大がかりな計画があるようにも思われます。加うるにハニー氏が米国の偉大な霊能者故エドガー・ケイシーの予言類を重視してときどきとりあげていることなどから考えて（この号のケイシーに関する記事もハニー氏のニューズレター八月号に掲載されたものです）思いあたるフシがないこともありませんが、とにかくピーターセンからの〝刊行物〟を待つことにしましょう。

◎ 先日宇部市在住の誌友で藤田祐一さんという方が訪ねて来られまして、円盤問題について語り合いましたが、この方はまだ学生ながらアダムスキ研究にずいぶん熱心な人であるように見受けました。そのとき聞いた話によりますと、「自分はかつて宇部市内の喫茶店で不思議な女性に会ったことがある。外見は一般人と変わりはなかったが、全身の緊張感を完全に開放しているように思われ、しかもこちらの心を見抜く力を持っているような気がした。あんな人をいままで見たことがない」ということでした。さらに〝気づかないでみ使いたちをもてなしている〟場合、どうすれば確証を得られるだろうかという質問に、編者は、それらしき人を見たときはまずテレパシーでもって「あなたは別な世界から来た人ですか？」と無言の質問を発すれば、相手がホンモノならば何かの反応があるでしょうと話したような次第でした。（久）

日本GAPニューズレター 一九六三 7月・8月
第17号 巻通
昭和三十八年八月十日発行
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
島根県益田市益田古川
振替 松江二六三〇（久保田八郎個人名義）
頒価 一〇〇円